

令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校 A) 報告書 矢野西小学校

1 学校の課題

特別支援教育の校内支援体制の構築にあたり、本校の課題は、①児童の実態把握に基づくニーズに応じた支援の検討、②学校組織としての授業づくりである。昨年度はこれらの課題を解決するために取組を行い、一定の成果を得ることができた。そこで、今年度は前年度の取組を基盤として、特別支援教育コーディネーターが専任化されていなくても実践できる校内支援体制の確立を目指したいと考えた。そのために、特別支援教育コーディネーターの仕事内容を精選するとともに、全教職員の資質向上と人材育成を図っていくことを目指し、取組を進めることとした。

2 研究主題

特別支援教育に係る校内支援体制の確立と一人ひとりの存在や思いが大切にされる授業づくり

3 取組内容

1 児童の実態把握に基づくニーズに応じた支援の検討

(1) 児童の実態把握と情報共有について

○特別支援教育コーディネーターによる授業観察

特別支援教育コーディネーターは、担任が記入した実態把握シートをもとに支援を必要とする児童や1年生の児童を中心に観察を行った。気づきを担任や学年、関係職員と共有し、行動の傾向など多面的な把握をしていった。

○全児童への Q-U の実施

「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」(以下 Q-U) は、児童の学級や学校生活における充実感や意欲、学級集団の状態を調べる質問紙である。Q-U の実施については、校務分掌の中に担当を割り当てた。年間計画の中に位置付けて5月と10月に実施し、児童の内面を把握した。2回のアンケート結果をもとに、学年や低、中、高学年のブロックで情報を共有する時間を設けた。加えて、学級での取組内容を考える時間を確保するようにした。担任を中心に、配慮が必要な児童への言葉かけやグループワーク等の取組を行った。

○学習サポーターとの連携

特別支援教育コーディネーターは、児童の実態を踏まえて学習サポーターの配置案を計画するとともに、隙間時間に情報交換や支援が必要な児童への具体的ななかかわり方及び支援の手立てについて、打ち合わせを行った。また、情報共有ファイルを活用し、学習サポーターと教職員が児童の様子等について最新の情報を伝え合った。

○保護者との連携

担任や学年での保護者対応が難しい場合には、特別支援教育コーディネーターが相談窓口となり、担任と保護者をつなぐ役割を担った。入学式で、特別支援教育コーディネーターから挨拶をし、相談窓口で

あることを伝えた。また、就学相談では、管理職とともに特別支援教育コーディネーターが保護者の相談にのり、学校生活がスムーズにスタートできるように実態や支援についての情報を共有した。

(2) 適切な指導・支援の検討について

○ケース会議の開催

組織的な支援を実施するために、まずは解決すべき児童の「困り感」について、学年の中で情報を共有するとともに、対応策を立てていった。必要に応じて特別支援教育コーディネーターも入り、一緒に検討していった。その後、対応策がうまくいっているかどうか、特別支援教育コーディネーターとして担任に声をかけたり、実際に様子を見に行ったりして、担任が一人で悩むことがないようにサポートした。

○全教職員の専門性の向上

桃山学院教育大学の松久眞実教授に「あたたかい学級づくり～ソフト面・ハード面～」について、そして広島文教大学の李木明德教授に「通常の学級における特別な支援が必要な児童への対応」について講話をしていただき、支援が必要な児童を含めた学級づくりや授業づくりについて理解を深めることができた。

特別支援教育コーディネーターがインクル通信を発行し、児童の困り感の背景にあるものと、その支援について情報提供するとともに、校内のミニ研修で、配慮を要する児童へのかかわり方について全教職員で共通理解を図った。

2 学校組織としての授業づくり

全学年が研究授業を実施し、「一人ひとりの存在や思いが大切にされる授業づくり～国語科『読むこと』を中心に～」について研修を行った。児童の実態を踏まえた「一人ひとりの存在や思いが大切にされる授業づくり」と「読みを深めるための手立て」について検討していった。中学校区小中連携公開研究会と兼ねたインクル A の公開授業研究会では、本校の取組を紹介するとともに、研究主題を踏まえた授業づくりができていたか、児童の実態を踏まえた支援が適切に行われていたかについて協議を行った。

○学習のスタンダードである「西っ子スタディ」【資料1】の徹底

低、中、高学年ごとに、発達段階に合わせて決まりや目的を明記した冊子を作成し、児童（保護者）、教師ともに同じものを持つようにした。毎月、児童にチェックする機会を設け、その都度学級での指導に生かした。

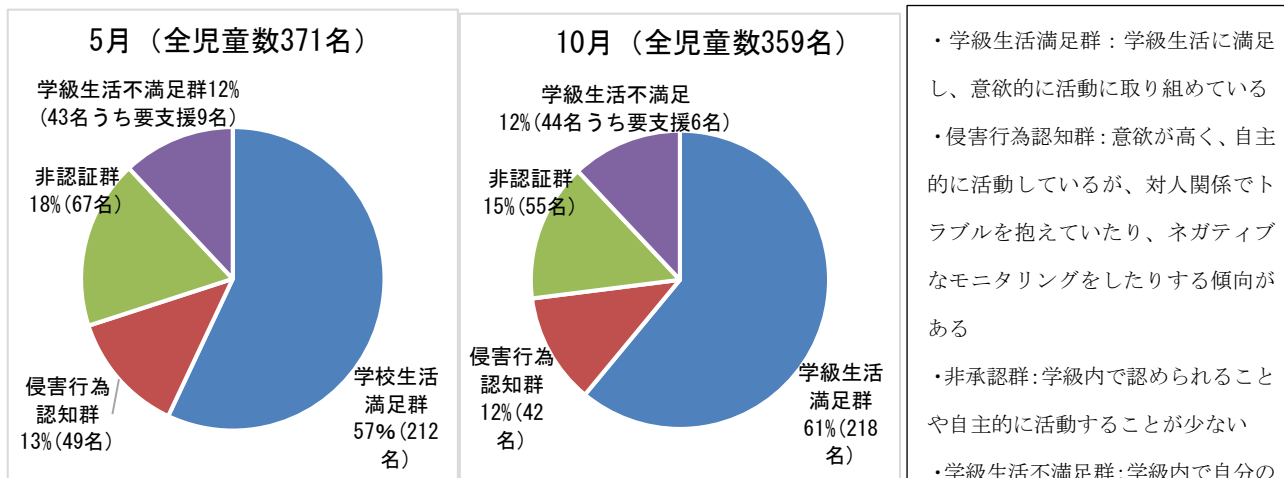
○授業のユニバーサルデザイン

校内で作成したチェックリスト【資料2】をもとに、各項目を4段階で自己評価し、日々の授業の振り返りに活用した。定期的にチェックする機会を設け、授業を行う際に、常に意識できるようにした。

4 検証結果

(1) 実態把握と情報共有について

全児童に5月と10月にQ-Uを実施した。全校全体の割合の結果を以下に示す。



- ・学級生活満足群：学級生活に満足し、意欲的に活動に取り組んでいる
- ・侵害行為認知群：意欲が高く、自主的に活動しているが、対人関係でトラブルを抱えていたり、ネガティブなモニタリングをしたりする傾向がある
- ・非承認群：学級内で認められることや自主的に活動することが少ない
- ・学級生活不満足群：学級内で自分の居場所を見いだせずにいる可能性が高い

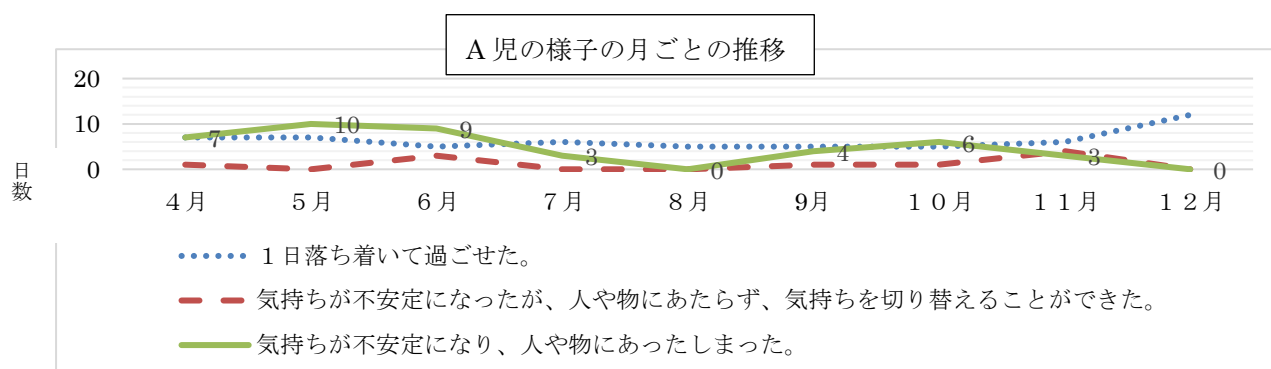
学級生活満足群の割合が増え、非認証群、侵害行為認知群の割合が減っている。これは、5月の結果を踏まえて、気になる児童に対して担任だけでなく、学年や学校全体で把握して見守るようにしたことや、自分の良さや友達の良さに気づけるように、各学級でグループワークを取り入れたり、いいところみつけをしたりしたこと等で、学級集団の中で先生や友達に認められ、自己の捉え方が肯定的なものに変化していったからだと考えられる。それぞれの時期の全児童数に対する学級生活不満足群の割合は変わっていないが、要支援の児童は9名から6名に減っていた。6名のうち3名は5月と同じ児童であり、昨年度の結果を見ても3名は同じであったことから、本人の性格も影響していると考えられる。担任に話を聞くと、数字に表れていないが、その子なりに良い方向に変化していることが分かった。短いスパンでの変化は難しいので、長期的な視点に立って支援していく必要がある。

(2) 適切な指導・支援の検討について

今年度は指定を受けて3年目ということもあり、教職員全体の専門性も高まってきている。12月に教職員に取ったアンケートで、「支援を必要とする児童の理解とその対応について専門性が身につけてきたと思いますか。」「支援を必要とする児童について、関係職員と情報を共有しながらニーズに合わせた支援を行うことができましたか。」という両方の質問項目に肯定的な回答をした教職員は100%であった。

【児童の変容事例：4年A児】

環境の変化への適応の弱さや感情のコントロールが難しいA児は、年度始めのクラス替えに加えて、運動会の練習も重なったこと等で気持ちが不安定になり、4月～6月は対人への暴力行為が続いていた。そこで、6月の中旬以降は、ほぼ毎日担任と学年の教員、特別支援教育コーディネーター、必要に応じて管理職も入り、情報の共有と支援の検討を行っていった。4月からのA児の様子の変容は以下の通りである。



落ち着いて過ごせる日が増えた要因として、担任だけでなく、特別支援教育コーディネーターを含めた複数で実態を把握しながら支援を検討し、それを全教職員で共有して関わっていったことや、保護者や関係機関とも支援の方向性を共有できたことが大きく影響していると考えられる。A児の暴力行為にはいろいろな背景があるが、A児の行動を多面的に見ていく中で、自分の思いを言葉でうまく伝えられないことが不適切な行動につながっているのではないかと分析した。A児の気持ちをくみとった共感的な言葉がけをすること、単語で伝えることを許容し、思いを伝えることが負担にならないようにすること、言葉で伝えることができたならほめること、適切な表現方法を一緒に考えることが効果的な支援であった。

(3) 一人ひとりの存在や思いが大切にされる授業づくりについて

国語科の公開授業研究会（本校職員15名を含む）のアンケート結果を以下に示す。大きく分類すると、集団への支援、個別の支援、安心できる集団づくりに整理することができた。

公開授業研究会アンケート集約結果（通常の学級45名、特別支援学級16名）自由記述の内容より	
●	集団への支援が効果的であった。（60名）
【	【 焦点化 】 ・指導内容を明確化し、一つにしぼる ・センテンスカード、段落プリントの使用
【	【 視覚化 】 ・全文プリントの使用 ・掲示物の工夫 ・人物関係図 ・学習の足跡の掲示
【	【 共有化 】 ・児童同士の意見交流 ・ネームプレートの活用 ・タブレットの活用 ・単元のゴールや活動の目標の共有 ・児童の発言をひろい、つなぐ授業形態
●	個別の支援が効果的であった。（23名）
・	・ワークシートの工夫、ルビ振り、文節での区切り線、言葉がけ
●	安心できる集団づくりが大切である。（21名）
・	・児童が発言しやすいあたたかい雰囲気づくり ・一人ひとりの発言を大切にする学級風土

本校職員のアンケートの記述を一部抜粋すると、「子どもの実態を把握し、どの子にとっても分かりやすい授業を行うことが大切であると実感した。」「視覚支援が有効であった。一方で視覚支援が多すぎて情報過多にならないように気をつけたい。」「一人一人の児童の発言を肯定的に受け止めていくことが大切である。」「学習規律が定着しており、それが授業につながっていることがよく分かった。」と挙げた。

課題としては、学校全体でタブレットの効果的な活用についてさらに検討する必要があること、教師対児童で授業を進めることが多く、児童同士の意見交流や話し合いの場面が十分でなかったことが挙げられた。

5月と12月実施した読みの精査・解釈における児童アンケートでは、全ての質問項目において、否定的な回答をする児童の割合が減っていた。

授業改善に向けて、学校全体で児童の実態を丁寧に把握し、必要に応じた支援を検討しながら進めてきた。授業のユニバーサルデザインチェックシートを活用し、授業の目標を達成するための集団への支援、個別への支援等を検討する中で、児童の変容が見られ、一定の成果を得ることができた。

5 研究成果

・Q-Uを実施し、結果を学校全体で把握するとともに、各学級で取組を考えて実施することで、配慮が必要な子どもを踏まえた学級経営や校内支援体制に生かすことができた。今後も継続して行い、児童の内面を探るための客観的資料として学校全体で情報を共有しながら活用していくことで、「困り感」をもっている児童への早期対応につながると思われる。

・実効的な支援体制を構築するにあたっては、特別支援教育コーディネーターとともに、管理職も一緒に児童の実態の共有や支援の検討等をしていくことが必要である。

・授業づくりにおいては、教職員全員が学習規律を徹底し、授業のユニバーサルデザインチェックシートを活用することで、誰にとっても分かりやすい授業づくりを行うことが定着しつつある。今後も必要に応じて見直しをしながら、「西っ子スタディ」や「授業のユニバーサルデザインチェックシート」は継続していくとよい。

・取組の具体的事例をパンフレットにまとめた。【資料3】として添付する。